

国際協力特別賞

海の向こうの叫び

大阪教育大学附属天王寺中学校 3年
岸本 皐汰

「こいつ、勉強はできても頭の中はからっぽじゃないか。」

公民の授業中、友人の口から発せられたなにげない言葉に、こう思わずにはいられなくなった。僕が受験をして入学した中学校は、設備もそろっており、僕達生徒はかなり良い環境で学校生活を送っている。その日の公民の授業は、憲法と教育についてが主な内容だった。丁度、各自の能力に応じた教育を受ける権利についての説明が終わった頃のことだ。隣の友人が僕の肩をつつきながら言った。

「じゃあ、今俺等が良い環境で勉強できるのは当然のことだな。」

いつもの僕なら、彼の冗談に笑って返すだろう。しかし、この時は、返事をするのも、笑うことさえもできなかった。気付けば彼に対する不信感が心の中で渦巻いていた。ではなぜ僕は彼の冗談を笑うことができなかったのか。その答えは、5年程前のある出来事までさかのぼる。

当時の僕は、まだ小学4年生で、世界に目を向ける余裕など持っていなかった。それよりも、目の前のことで精いっぱいだったのだろう。ところが、そんな僕にある転機がおとずれる。正確な時期等は覚えていないが、僕のいた小学校に一人の女性が講演をしに来たのだ。彼女はあるボランティア事業で、中米のホンジュラスという国へ行き、現地の子供への教育に携わったらしかった。彼女は、講演で、現地の状況等を熱心に語っていた。しかし、その内容は、僕の頭には入ってこなかった。そのまま、講演が終わった。結局、僕は講演から何も得ることができなかったのだ。彼女は講演後、短くなった鉛筆や小さくなった消しゴムがある人は私に出来ないかと呼びかけた。すると、正義感の強い数人の生徒が彼女に鉛筆や消しゴムを渡した。そして、それを見た多くの生徒も、彼等同様、鉛筆を手渡していった。僕も、自分だけしないのは嫌だという考えで、彼女に消しゴムを一つ渡した。しかし、この行動が僕の人生を大きく変えることとなる。

それから数ヶ月後。僕らの元に、百枚を超える手紙が届いた。それらは全て、見たこともないような文字や言語、それから絵がかかれていた。書かれている文章は、もちろん全くわからなかった。しかし僕は、手紙一つ一つからはっきりと感謝の気持ちを感じた。彼等

は、勉強ができることを心から喜んでいたので。空っぽだった僕の頭が、足りなかったもので満たされていった。遠い海の向こうにいる彼等の、心の叫びはしっかりと僕に届いたので。僕は、顔も知らない彼らから、多くのことを学んだ。

僕ら一人一人にできることは、確かに小さいだろう。しかし、まずは自分を足りない何かで満たすべきだ。何かをはじめするには、第一歩が大切だ。いくら小さかろうが、これがないと目標にはたどり着けないのだから。